

シェイクスピア劇と狂言の出会い

——新作狂言『二人女房』と『ぢゃぢゃ馬馴らし』について

菊地 善太

日本大学大学院総合社会情報研究科

Encounters of Shakespeare Plays and Japanese Kyogen

—Two New Kyogen Works, *Ninin-Nyobo* and *Jajauma-Narashi*

KIKUCHI Zenta

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

In 1952, two Shakespeare plays were adapted to the Japanese kyogen for the first time—*Ninin-Nyobo* (Hiromichi KATAYAMA's adaptation of *The Merry Wives of Windsor*) and *Jajauma-Narashi* (Tokuro MIYAKE's adaptation of *The Taming of the Shrew*). This study examines their backgrounds, performances, and some of the features. Although Japanese Shakespeare scholars have neglected, *Ninin-Nyobo*, it is clearly an adaptation of Shakespeare's comedy. It is also confirmed that the date on which *Jajauma-Narashi* was first performed was June 15, 1976 while *Ninin-Nyobo* was first performed on June 7, 1952.

1. はじめに

シェイクスピア劇が初めて狂言に取り込まれたのは昭和 27 年 (1952) のことで、新作狂言『二人女房』(『ウィンザーの陽気な女房たち』翻案、片山博通 (1907-1963) 作) と新作狂言『ぢゃぢゃ馬馴らし』(同名作品翻案、九世三宅藤九郎 (1901-1990) 作) が相次いで創作された。本稿ではそれぞれの作品の特徴と成立過程を考察する。新作狂言『二人女房』は、これまでシェイクスピア研究者が殆ど取りあげてこなかったが、今回の調べでシェイクスピア劇翻案と確認された。また、新作狂言『ぢゃぢゃ馬馴らし』の初演は、昭和 51 年 (1976) 4 月ではなくて、6 月 15 日が初演日であったことが確認された。

佐々木隆によれば、シェイクスピア劇を原作とする狂言の創作は、次の 3 つに分類できる。

- (1) シェイクスピア作品の完全な狂言化
- (2) 狂言版シェイクスピア
- (3) 原語シェイクスピア狂言

上で、(1) はシェイクスピア劇を完全に狂言化したもので、シェイクスピア狂言と呼ばれる。(2) は

逆に狂言をシェイクスピア劇化したもので、舞台装置や照明の利用もありえる。そして (3) はシェイクスピアの原語を用い完全に狂言の様式を守った狂言、すなわち原語シェイクスピア狂言である。

創作・初演年の順に (1) ~ (3) となるが、本稿では日本で最初に創作された「シェイクスピア狂言」の二作品を取りあげる。

2. 三宅藤九郎作・新作狂言『ぢゃぢゃ馬馴らし』

平成 2 年 (1990) に英国でジャパンフェスティバルが催され、その前後でシェイクスピア作品を題材とした新作狂言の上演が相次いだ¹。この頃シェイクスピアと狂言についての研究も盛んになり、駒澤大学の研究者グループは、関連シンポジウムや試演を重ね、その成果の一部は滝静寿編著『シェイクスピアと狂言』新樹社、1992 年として出版公開された。

これは特筆すべき先行研究である。その中で狂言化されたシェイクスピア翻案の最初の作品として三宅藤九郎作『ぢゃぢゃ馬馴らし』が挙げられ、以降

この分野に関心のあるシェイクスピア研究者の目が、藤九郎の新作狂言『ぢゃぢゃ馬馴らし』に向くきっかけとなった。

2.1 創作年、初演日と初演会場などの確認

上記『シェイクスピアと狂言』によれば、シェイクスピア劇翻案作品の中で、日本で初めて創作され初演された狂言作品は、九世三宅藤九郎作の新作狂言『ぢゃぢゃ馬馴らし』であった。初演は息子の和泉保之（後の元秀）シテによる。同書によれば、三宅藤九郎によって創作されたのは昭和 27 年（1952）7 月、和泉元秀による初演は昭和 51 年（1976）4 月（10 日）、宝生能楽堂とある²。

後に荒井良雄氏ならびに佐々木隆氏にうかがったところ、創作年や初演の上演年月の確認は、主として三宅藤九郎の『藤九郎新作狂言集』能楽書林、1950 年と、主演者である和泉元秀の『狂言を観る』講談社、1983 年に拠ったとのこと。前者で『ぢゃぢゃ馬馴らし』の創作年は昭和 27 年 7 月とされ、後者では初演日が昭和 51 年 4 月 10 日と明記されている。

初演年月などについて、論文でこれまで異論は見当たらず、たとえば平成 19 年（2007）の平辰彦「異文化プロダクションによるシェイクスピアの翻案と日本の伝統芸能」の論文³においても、初演年月日などは、上記の内容が引用されている。

しかし最近になって、和泉保之（元秀）による初演日は、昭和 51 年 4 月ではなく、同年 6 月 15 日であったことが判明した。これは佐々木隆氏から本年 7 月下旬にご指摘いただいたもので、『能楽タイムズ』記事を調べたところ、実は 6 月 15 日が初演日であったとのこと。早速、『能楽タイムズ』記事や新聞記事、『華泉』記事などを調べ、4 月に予定されていた「第 44 回和泉会」がストの為に中止され、6 月 15 日に開催されていたことを確認した⁴。

なお、上演日訂正にとどまらず、演者名や上演会場についても、「和泉元秀」は昭和 51 年の当時は「和泉保之」を名乗っており、「宝生能楽堂」も当時の名称は「水道橋能楽堂」であったことを確認した。こうした記載は、記録としては当時の名称で統一すべきであった⁵。

なお、三宅藤九郎による創作年については、『藤九

郎新作狂言集』とその引用と思われるもの以外で、昭和 27 年 7 月の創作を示す資料は、今のところまだ見つかっていない。しかし、遅くとも昭和 28 年 8 月までに作られていたことは、昭和 28 年 8 月の『能楽タイムズ』第 18 号一面の「狂言界の新しい風」で、下記の記述があることから確認される。

同じく萬斎氏の次男たる藤九郎氏は、新作に対して甚だ野心的で既に自作狂言は十指にあまる。

（中略）

この他に同氏未発表のものとして沙翁の「ぢゃぢゃ馬馴らし」があるとのこと…

2.2 構成、作品の特徴について

新作狂言『ぢゃぢゃ馬馴らし』の作品の特徴や工夫について、三宅藤九郎は、後援団体である和泉会の会誌『華泉』第 26 号（昭和 51 年 6 月）の「新作シリーズの三番について」の寄稿の中で、次のように語っている。

「ぢゃぢゃ馬馴らし」はシェイクスピア原作で、私の新作の中で翻案物はこれ一番だけです。（中略）やはり外国の作品は本質的に狂言になりにくいところがあります。原作にはいろいろな話があるのに、それを裸にして芯だけを取り出さないと、狂言としての筋が通りません。「ぢゃぢゃ馬馴らし」は、シテを馬喰にしたことと、開曲の部分を「鎌腹」「吃り」と同じ形式の演出にしてみたことが狂言化するに当たってのミソですが、今度はさらに、トメを謡いドメにしてみました。……娘の人間像が幸いにして可愛い女のタイプに描けているとすればそれは原作の力です。

「芯だけを取り出す」。つまり原作を簡略化し、狂言の演出をして、狂言らしい狂言に仕立てた。三宅藤九郎は新作狂言を作るにあたり、父萬斎に言われた「狂言のワクを外さぬように」ということを常に心がけていた。

新しい狂言や小舞の必要を感じて作りはじめたころは、新作の上演が他にほとんど無かったので、

一部に批難の声も随分耳にしたが、亡父萬斎の深い理解に支えられて続けることが出来た。それだけに、「狂言のワクを外さぬように」との父の注意を常に心がけた。(前出『藤九郎新作狂言集』冒頭の「著者自序」より)

狂言らしさを追求することこそ、三宅藤九郎の新作創作の姿勢であった。「開曲の部分を「鎌腹」「吃り」と同じ形式の演出にした」、「トメを謡いドメに」とあるのは、狂言そのものの演出を狙っていたことの、明確な証拠である。

この作品論としては、前出『シェイクスピアと狂言』に掲載された富谷俊治(荒井良雄代筆)「新作狂言『じゃじゃ馬馴らし』論」⁶が詳しい。荒井良雄は、この新作狂言が、登場人物や幕場を絞り込んだ構成にし、狂言的な演出をほどこし、原作にはない馬喰の「落ち」を付け加えるなどして狂言化されたことを具体的に示し、完全な狂言化を狙ったものであると論じた。一部を抜粋して引用する。

藤九郎は『じゃじゃ馬馴らし』の狂言化にあたって、序劇を全部カットし、一幕もカットして、二幕の結婚申し込みの場面から入る構成をとった。したがって、ルーチェンシオーやホーテンシオーやビヤンカは登場せず、親(パプチスタ)と娘(カタリーナ)と馬喰(ペトルーチオー)の三人だけの登場人物に絞り込んで、完全な狂言化を狙った。

…親が「金銀財宝を添へて」、じゃじゃ馬娘を嫁に出すことを告示する高札を、シテ柱に打つくだりは、狂言の伝統的な型を取り入れている例である。(中略)

娘と馬喰が扇で酌をしながら酒を飲む場面も、最も伝統的な狂言の型である。原作の四幕一場が下敷になっているようだが、原形をとどめないほど、完全に狂言化されている。(中略)

…親が「さてはこなたは馬喰殿でござったか」といって、じゃじゃ馬馴らしが得物であることを知るくだりは、シェイクスピアの原作にはない、狂言版独自の脚色であり効果的な「落ち」である。

最後に、馬喰と娘が意気投合して、「五百八十万々年も連れ添ふぞ」と言いながら、橋掛に入る

のも、原作のラスト・シーンの協調の精神の見事な狂言化である。

また、最後の終り方に関して、原作が、結婚で終わり雄弁な演説で締めくくられる西洋喜劇のスピーチの伝統を受け継ぎ、狂言版が、日本文化の伝統である抑制の美学を受け継いでいることを論じた。そして、両者ともに協調の精神に貫かれうまく折り合いをつけていることを、「東西共通の喜劇精神、喜劇の心」と述べて、強調している。

以降も、研究者により度々本作が論じられるが、いずれも上記荒井良雄の作品論が基礎になっているようだ。佐々木隆は、役者人数を絞り、複雑な筋を簡略化して、上演時間を短縮したことを指摘して、「みごとに狂言化されている」と称賛した⁷。平辰彦は、「題材をシェイクスピアの作品に求めながら、完全な新作の狂言として上演されている」と評した⁸。

平辰彦は、最後に西洋的な「演説」で終わる場面が狂言的な「落ち」に置き換えられたことを、＜和の精神＞の表象と明察した。

2.3 成立過程について

三宅藤九郎は、『華泉』第23号(昭和49年10月)の談話「私の新作狂言」の中で、新作狂言を書くようになった動機について、次のように語っている。

新作狂言を書くようになった動機は、父の萬斎が巖谷小波さんの作った「風無風」というのをやって、その相手を兄と私がやった時に、刺激を受けたのが始まりです。それは十代の時でしたが、その何年か後に、大体旧作といえども元は新作だったはずだ、それならその時代々々の狂言があってもいいのではないかと考えましてね、父に相談しました。父は当時としては、進歩的というか、新しいことに理解のある人でしたから、即座に「よろしい」と許してくれましたが、一言「ただし狂言から逸脱したものはいけない」と釘をさされました。もとより、私自身、突拍子もない新奇なことはやるはずもないし、やれもしない。今までの狂言の骨法で、何か新味のあるものをもとを考えました。

「その時代々々の狂言」「新味のあるもの」を創りたいという動機がうかがえるが、特に『じゃじゃ馬

馴らし』が新作狂言になると思ったことについて、三宅藤九郎は同じく『華泉』第23号で、次のように述べている。

シェイクスピアの「ちゃちゃ馬馴らし」を読んだ時は、すぐに「これは狂言になるな」と思いました。

三宅藤九郎が読んだ本を考えると、『ちゃちゃ馬馴らし』の翻訳は、当時、坪内逍遙による本しか出版されておらず、逍遙訳を読んだと考えられる。しかしながら、芝居も観ずに、いきなり本だけを読んで新作狂言を書くだろうか、その点に疑問を持った。

そこで、演劇の上演を調べたところ、昭和26年6月に、早稲田大学大隈講堂にて、劇団・近代劇場により『ちゃちゃ馬馴らし』の新劇上演がなされており⁹、これを観た可能性があることが考えられた。

もし三宅藤九郎が新劇に興味があり、あるいはその劇団員等に縁があって、この新劇公演を知り観ていたとしたら、これが直接のきっかけになって、シェイクスピア劇を、先の『華泉』記事における「新味のあるもの」と捉えて新作の創作を考えたとしても不思議はない。

これは荒井良雄氏から聞いた伝聞であるが、上記公演に出演した俳優の原孝之が、この上演前の一時期、三宅藤九郎家の内弟子をしていたという。これで、三宅藤九郎と原孝之、原孝之と『ちゃちゃ馬馴らし』公演とが繋がった。

そこで本稿では、三宅藤九郎とシェイクスピアの出会いについての仮説の一つとして、俳優原孝之を介した観劇説を提案する。

原孝之（1925－2010）は、荒井良雄氏からいただいた資料によれば、昭和22年（1947）末から2年間ほど、まだ早稲田大学の学生だったうちから三宅藤九郎家の内弟子をつとめ、昭和25年の近代劇場の創設とともに俳優に転じたという¹⁰。

荒井良雄氏からは、次のエピソードも伺った。戦後間もない当時、戦争で家を焼かれ、狂言装束も全て失った三宅藤九郎は、早稲田大学演劇博物館に亡くなられた狂言師の狂言装束等が寄贈されたことを知り、同館から狂言装束を借りたことがあったとい

う。装束寄贈については、早稲田大学演劇博物館編著『演劇博物館五十年』（1978年）に、昭和23年暮れ、和泉流の狂言師・多々良外茂三師の没後、同師が生前使用していた狂言装束小道具類が一括して早稲田大学演劇博物館に寄贈され、翌昭和24年1月に展示会が開催されたことが記されている¹¹。

この当時、まだ早稲田大学の学生ながら三宅藤九郎の内弟子をしていた原孝之が、手続き等で色々と奔走したことは想像に難くない。

こうして三宅藤九郎と原孝之との関わりが深まり、その後昭和26年6月の『ちゃちゃ馬馴らし』公演では、原孝之出演の同公演を観に行った可能性が高い。原孝之がホーテンシオー役で出演していたことは、荒井良雄の著作『坪内逍遙と加藤長治』に記載がある¹²。観劇で作品に興味を持った三宅藤九郎が、坪内逍遙の翻訳を読み、アイデアを練って新作狂言を作った、と考えられる。

なお、別の仮説として、佐々木隆は、成立過程の研究は今後の課題としながらも、昭和27年4月27日に放送された、日本文化放送の『ちゃちゃ馬馴らし』のラジオ番組の影響を指摘している¹³。

3. 片山博通作・新作狂言『二人女房』

3.1 創作年、初演日と初演会場などの確認

前節で見てきたように、日本で初めて上演されたシェイクスピア翻案の狂言作品について、これまで研究者の関心は、主として三宅藤九郎作『ちゃちゃ馬馴らし』に集まっていた。しかし今回、新作狂言について調べる中で、古川久・小林責編『狂言辞典（資料編）』東京堂出版、昭和60年（1985）の「新作狂言一覧」の表の中で、『ちゃちゃ馬馴らし』より一カ月早い昭和27年6月に、新たなシェイクスピア翻案の新作狂言『二人女房』の創作がなされていたことを示す、下記の記載を見つけた。これが事実であれば、これまで研究者たちが見落としていた重要な発見となる。

曲名	作者	作・上演 年 月	演出者
にんにょうぼう 二人女房	片山博通	昭27・6	片山博通

上演会名	主演者 または 上演団体	発表誌	備考
千五郎 後援会	茂山 千五郎	『観世』 昭 28・6	シェークス ピア「ウィ ンザーの陽 気な女房た ち」による

古川久・小林責編『狂言辞典(資料編)』東京堂出版、
昭和 60 年(1985)より

さっそく裏付けをとるべく『観世』当該号を確認したところ、「二人女房＜新作狂言＞……片山九郎右衛門¹⁴」という目次のもと、17 ページから 21 ページに渡って『二人女房』の台本が掲載されていた。ただし台本のところの作者名は、「新作狂言 二人女房 片山博通」とある。九郎右衛門と名乗った時期であるが、狭義の能楽師の活動以外では博通を用いたのか。

初演日について、台本の後に附記があった。

(附記) この台本を執筆するに就て、茂山千之丞氏のひとかたならぬご協力を仰いだ。記して感謝の意を表す。又、この狂言は、茂山千五郎氏などによつて去る六月七日、京都で初演されたのである。

これにより「曲名」「作者」「作・上演年月」「主演者」及び「発表誌」がひとまず確認できた。昭和 27 年 6 月 7 日初演については、『能楽タイムズ』第 18 号(昭和 28 年 8 月)にも記載があった。

残る「演出者」「上演会名」「備考」を確認すべく調べを進める中、『能楽タイムズ』第 24 号(昭和 29 年 3 月)の片山九郎右衛門「新作狂言について」の記事の中に、次の記載を見つけた。

現に私などでも、シェクスピアの「ウインザーの陽気な女房たち」から筋を盗んで、二人女房を作り上げた位だから、…

これにより、本人談をもって、新作狂言『二人女

房』がシェイクスピア劇『ウインザーの陽気な女房たち』の翻案狂言であることが確認された。

残る「演出者」と「上演会名」についても、茂山千五郎『千五郎狂言咄』講談社、昭和 58 年、巻末「茂山千五郎 年譜」に下記を見つけ、先に確認した「上演日」などの事項も含め、再確認できた。

昭和二十七年 三十三歳

一月十三日、父千五郎の後援会第一回公演が「名人茂山千作第三年祭、東西合同狂言大会」のタイトルで催される。六月七日、第二回公演「狂言と京舞鑑賞会」にて、父千作が新作小舞「ささめ雪」を舞う。同時に新作狂言「二人女房」(片山博通作・演出)初演、四万台五郎・父千五郎、太郎冠者・千之丞、いちや・田中庸皓、女房・七五三(祇園歌舞練場)。

ところで、初演日について、一つだけ 6 月 17 日とした資料があった。『観世』(昭和 38 年 5 月号)の片山博通師追悼特集号である。ここに掲載の「片山博通・新作狂言表」では、初演日が 6 月 17 日となっていた。初演から 10 年経った時点の記事であり、ほかに 6 月 17 日とする資料は見当たらない現状で誤植と考えている。なお、『京都新聞』昭和 27 年 6 月 7 日夕刊「文化メモ」欄にも、下記の記載があった。

狂言京舞の鑑賞会

七日午後二時始、祇園歌舞練場、主催茂山千五郎後援会。小舞、谷崎潤一郎作詞「細雪」茂山千五郎、片山博通作「二人女房」入間川、瓜盗人、口真似京舞「玉取海土」井上八千代

これは当日の鑑賞会の案内記事で、実際に舞台を観ての記事ではなかろうが、少なくとも夕刊原稿締め切り時刻の時点で、交通ストなどによる中止はなかったことがうかがえる。

以上から、片山博通作・新作狂言『二人女房』がシェイクスピア作『ウインザーの陽気な女房たち』の翻案であり、片山博通の演出のもと、茂山千五郎らによる千五郎後援会第二回公演「狂言と京舞鑑賞会」での初演が、昭和 27 年 6 月 7 日、京都・祇園歌

舞練場にて催されたことが確認できた。

3.2 新作狂言創作について

まず、作者・片山博通（九郎右衛門）の言葉から入りたい。『能楽タイムズ』第24号（昭和29年（1954）3月）「新作狂言について」の記事で、片山は新作狂言創作について、次のように語っている。

筋を発展させて行く事は、誰でも出来ることだ——現に私などでも、シェイクスピアの「ウインザーの陽気な女房たち」から筋を盗んで、二人女房を作り上げた位だから、先ずまず一應は、誰でも狂言は書けると思うのだが、先に云ったような次第で、その狂言がスツキリするのも、しないのも、一に、オチの良さにかかっているのだと、私は思う。

もう一つは、狂言の題材は庶民的だと云つても、あまり品の悪いものはいけないのではなかろうか。外国種は何處までも、狂言らしく、こなれないのじやなかろうか。その題材にもよるが、面白さが猥雑になっても困るのだ。品が良くて、洒落ていないと、狂言にならないと思う。題材を選んで狂言を書かない、それがいくら、狂言形式を踏んでいても、五郎劇や松竹新喜劇以下の二輪加芝居でしかなく、わざわざ、中世の狂言という形式をとる必要がないのではないかと、私は思う。

さらに続けて、片山は次のように書いている。

結局、自分で書いてみて、昔の人のスツキリした、あくの抜けた味は、現代の人間には出来ないのではないかと、つくづく思つた事だつた。そうして、今更ながら、古作の狂言の良さを知つたのだつた。

片山にとって、「オチの良さ」と「品の良さ」が大事であり、スツキリしてオチがあり品のある理想の狂言は、実は古い作品「古作の狂言」の中にあつた。ゆえに、片山の新作狂言もまた、前述の三宅藤九郎と同様に、古くからの狂言らしい狂言、すなわち完全な狂言化を目指していたことがわかる。

今回の『二人女房』の粗筋やオチについては、前出『千五郎狂言咄』にて千五郎が語っているので、下に引用する。

四万台五郎というエライお役人が浮気をする。やきもち焼きの奥さんがこれをこらそうとするが、結局は折れるという筋です。そのころ、ちょうど「四万台」という言葉が流行していたのです。お役人の公用車が白ナンバーの四万台だったので、それをもじった名前で、役人の汚職と弱気な夫の浮気を皮肉った内容でした。太郎冠者が、「とかくお役人と申すものは、押しばかり強くて、勘のにぶい者でおじゃる」というと、客席でドッと笑いが起こったものです。

役人の汚職と弱気な夫の浮気を皮肉った内容に仕立てられ、「四万台」の言葉遊びも受けて大笑いされたと思われる。

3.3 構成、作品の特徴について

以下、新作狂言『二人女房』の構成と特徴について見て行きたい。まず構成であるが、登場人物は、四万台五郎（役人）、その妻（おごう）、女（いちや）、太郎冠者の四人だけであり、筋も原作から大きく削られて簡略化された。日頃威張り散らしているお役人さまが、女たちの罠にはまって懲らしめられ、弱弱しく許しを請うところが滑稽でオチがあり、観客は主人公の変わり様に驚き、笑わされる。登場人物の名前に原作の面影はなく、太郎冠者などそのまま典型的な狂言の登場人物の名前である。

冒頭、「これは四万台五郎と申す」と狂言の型にはまった名乗りから始まる。場面は、四万台が太郎冠者に女への手紙をことづける場面から始まる。嫌がる太郎冠者を口説いて送り出す。原作では第一幕三場、フォルスタフが家来二人に、二人の女に手紙を届けるよう命じる場面に相当する。原作では女を騙して金を巻き上げようとの企みのこもった手紙だが、狂言版では単純に浮気の手紙である。

その後、女のもとに向かった太郎冠者は、手紙を迷惑がる女から賄賂を受け取り、嫉妬深い妻を利用して主人を懲らしめる謀（はかりごと）をするよう

に提案する。原作にない話が補われて、観客は話の筋がよくわかる。妻は「わわしい女」であり、これも典型的な狂言の人物像にはまっている。

続いて女たちの談合場面に移る。原作では第二幕、女たちが鉢合わせし、フォルスタフの企みを知って仕返し談合をする場面である。嫉妬深い片方の夫も登場し、家来の密告もあって話は複雑である。一方狂言版では、妻が手紙を読んで激怒し、仕返しに加担することになる。太郎冠者が女の夫に化けて浮気現場で主人を打ちすえる事を企む。

続く場面、太郎冠者が遭い引きと偽っての誘い出しに乗り、主人は妻と太郎冠者が隠れて見守る中、女と会う。そして夫が来たと言われて隠れた（皆にばれている）先で、女の夫に化けた太郎冠者が四万台を打ちすえる。

原作では、第三幕で、仕組まれた遭い引きにより、フォルスタフはまずテムズ河に投げ込まれる。そして、第四幕、もう一人の女との遭い引きで今度は散々に殴られる。さらに子供たちが妖精に化けていたずらする計画も立てられ、第五幕で実行される。

狂言版では、最初の河に投げ込まれる場面は削られて、筋が簡略化されている。

そして、最後の場面、狂言版は、夫が打ちすえられたのを見かねた妻が、女と太郎冠者を追い出し、夫を叱りつけようと追い回す。原作では、今度は森で妖精に化けた子供たちに脅され、蠟燭を当てられ、抓られたりして、ようやく騙されたことに気づく。そんな茶番劇の一方で、西洋喜劇の定番に倣い、ひと組の若者のカップルが結ばれて、めでたく終わる。原作はカップルが結ばれる形で終わるが、狂言では、妻が浮気夫を追いかけながら、狂言らしく終わる。余分な二人を追い出し、原作のカップルの話を削って、夫婦の話に収束させたことで、非日常的な浮気騒動は日常的な夫婦げんかにすり替わり、観客は安心感を得る。ここにも一種抑制の美学がある。

このように、狂言版は原作から大幅に筋が改変されているが、粗筋で見ると、原作をなぞっていることは明白である。特徴として、狂言らしく分かりやすい筋に単純化され、適当な上演時間の分量になった。登場人物の名前も、セリフの言い回しも、きわめて狂言的であり、狂言らしく演出することで完全

に狂言化された作品となる。そして、『ぢゃぢゃ馬馴らし』の狂言と同様に、これも東西共通の喜劇の面白さが感じられたことが、前出『千五郎狂言咄』に載っていた劇評から読み取れる。

その時の新聞を見ますと、生島遼一さん（当時は京都大学吉田分校教授、現京都大学名誉教授）も「西洋喜劇と狂言は共通のものを持っている。言葉もわかりやすいし、面白いものだ」とほめてくださっています。

3.4 高橋康也『法螺侍』1991年5月

ところで、シェイクスピアの『ウィンザーの陽気な女房たち』を原作とする新作狂言には、片山博通の作品の他に、高橋康也作の新作狂言『^{ほらざむらい}法螺侍』（平成3年（1991）5月8～11日、野村万作演出、東京グローブ座、「万作の会」にて初演）がある¹⁵。

高橋の新作狂言『法螺侍』は、本稿の最初の方で取りあげた佐々木隆の分類で、「(2) 狂言シェイクスピア」に相当する。佐々木はその特徴を、次のように解説している。

『法螺侍』の場合は、狂言の様式に囚われることなく、自由な発想のもとに上演された。翻案を仕上げた高橋康也は、平成三年四月二十日の東京・九段のELEC会館七階ホールで「ウィンザーの法螺侍——シェイクスピアを狂言化する」と題して講演を行った。（中略）新しい試みとして、これまでの伝統的な狂言では考えられなかった舞台装置や照明などを取り入れたことを、特に強調した。『法螺侍』の場合には狂言のようにプロットが単純化されておらず、能楽堂ではないふつうの劇場で上演されたために出入りが自由に行われていたり、劇自体が六幕形式となっていることも、ふつうの狂言では考えられない。

上記後半の特徴は、そのまま片山博通作・新作狂言『二人女房』との違いである。こちらは主人公が川に放り込まれる場面もある。高橋の『法螺侍』と較べてみることで、『二人女房』の特徴である狂言らしさが浮かび上がる。

3.5 成立過程について

片山博通が、新作狂言『二人女房』を創作することになった動機について、前出『千五郎狂言咄』に下記の記載がある。

片山さんは、なかなか多趣味な方で、歌舞伎や新劇も好きで、よく見にいったおられました。たまたま俳優座がやったシェイクスピアの「ウインザーの陽気な女房達」を見られて、これは狂言になると、早速書かれたのが、「二人女房」なのです。

これにより観劇によって刺激されたのが明白であるが、片山が観たと思われる俳優座の『ウインザーの陽気な女房たち』の劇は、佐々木隆編『日本シェイクスピア総覧』（エルピス、2005 年）の上演年表によれば、昭和 27 年 1 月 5 日～2 月 11 日の三越劇場での公演、もしくは昭和 27 年 4 月 9 日～11 日の日比谷公会堂での公演に候補が限られる。（下記）

月 日	題 名	翻訳・演出等
昭和 27 年 1 月 5 日～ 2 月 11 日	ウインザーの 陽気な女房たち	三神勲・ 西川正身訳 青山杉作 演出
昭和 27 年 4 月 9 日～ 11 日	ウインザーの 陽気な女房たち	三神勲・ 西川正身訳 青山杉作 演出
劇団・製作等	主な配役・その他	劇場・会場
俳優座	フォルスタッフ 千田是也 フォード 小沢栄	三越劇場
俳優座 青年劇場	フォルスタッフ 千田是也 フォード 小沢栄	日比谷 公会堂

（佐々木隆編『日本シェイクスピア総覧』2005 より）

翻案である新作狂言『二人女房』が同年 6 月初旬に初演されたことを考えると、4 月ではあまりに創作の時間がなく、用事で 1 月か 2 月に上京した折に

三越劇場で観た可能性が高い。朝日新聞昭和 27 年 1 月 6 日夕刊に載った公演評に「笑いの止まらぬ喜劇である」とあり、片山の興味を惹いたであろう。

また、三神勲・西川正身・翻訳による『ウインザーの陽気な女房たち』が、ちょうど昭和 27 年 2 月に河出書房・市民文庫から出版されている。本好きの片山はすぐに買って読んで¹⁶、新作の台本作りに役立てたと思われる。

そして、前出『千五郎狂言咄』の引用のところでみたように、片山博通も三宅藤九郎同様に、狂言らしい狂言を意図していた。追悼特集の組まれた『観世』昭和 38 年 5 月号に載った座談会「父（故片山博通）を語る」の中で、司会の権藤芳一から新作のことを問われ、長男の博太郎は次のように答えている。

権藤 新様式能とか新作狂言の演出とか新しい仕事をたくさんしてこられましたが、そういう事についてはいかがでしたか。

博太郎 僕等からいわせると、あゝゆう仕事をしてた割に、他の人に比べて凡そ親父ほど古くさい考え方を持っていた人はなかったと思うのですよ。新しい事は好きやったけど…

この「古くさい考え方」は、古き良き伝統に倣うことに繋がるのではないか。

最後に、昭和 27 年になぜ、2 つのシェイクスピア狂言が相次いで創作されたのか、考えてみたい。

片山博通と三宅藤九郎は、ともに能・狂言を生業とする家に生まれた。ともに次男坊で、多少反対されても新作を書く熱意があった。新作狂言が書ける稀有な二人は、戦後シェイクスピア劇が上演されだした頃、時を同じくしてシェイクスピア喜劇に出合い、直ちに創作意欲を湧かせ、相次いで新作狂言を創作した。何と境遇が似通っていることだろう。

ここで、一つの仮説を考える。まず、意欲ある狂言作家に創作のきっかけを与えれば、速やかに新作を書くことと仮定する。さらに、きっかけを喜劇二作の観劇と仮定すれば、二人が上演を同時期に観ることで、新作が相次いで誕生することになる。新作を書ける能楽師・狂言師の登場と、シェイクスピア喜劇を観られる機会、そういった条件が揃ったのが、ち

ようど昭和 26、27 年であった。二人の狂言作家がこの時期に現れるのは偶然で、同時期に観劇するのも偶然であるが、二つの仮定、二つの偶然を認めれば、きっかけを得て新作を作ることが必然となる。但し、世が世なら新作を書くことなど全く許されなかった。時代の後押しも一つの要因であろう。

4. まとめと課題

新作狂言『二人女房』(『ウィンザーの陽気な女房たち』翻案、片山博通作)と新作狂言『ぢゃぢゃ馬馴らし』(同名作品翻案、九世三宅藤九郎作)について、それぞれの作品の発表と初演の年月を調べ、特徴と成立過程を考察した。

新作狂言『二人女房』は、これまでシェイクスピア研究者によってほとんど取りあげられていないが、今回の調べでシェイクスピア劇翻案と確認した。

また、新作狂言『ぢゃぢゃ馬馴らし』について、初演年月日や会場名などを確認し、一部を訂正した。

今後の課題として、これら二つに続くシェイクスピア狂言創作・上演について、作品の特徴や上演年表などを調べていきたい。佐々木隆の分類における、(2) 狂言シェイクスピア作品や、(3) 原語シェイクスピア狂言作品も同様である。

また、シェイクスピア狂言がある一方で、シェイクスピア能も創作され、上演されている。シェイクスピア能も合わせて研究し、シェイクスピア能楽としての可能性を論考していくことも、今後の課題である。

註

¹ 荒井良雄『『詩学』と『花伝書』——東西喜劇比較研究の序として』(滝静寿編『シェイクスピアと狂言』新樹社、1992 年所収)によれば、1990 年から 91 年にかけて、下記の新作狂言が相次いで上演された。

和泉宗家の『ぢゃぢゃ馬馴らし』、万作狂言団の『法螺侍』(フォルスタフ)、ケニー小川狂言団の原語狂言『夏の夜の夢』(ピラマスとシスビ)、と『リア王』(グロスターとエドガー)、そして和泉宗家の『夏の夜の夢』(ボトムの変身)と『十二夜』(手紙の場面)の順である。

² 荒井良雄「英語狂言の創造をめぐる」(前出『シェイクスピアと狂言』所収)には、昭和 27 年(1952)7 月に台本発表で、昭和 51 年(1976)4 月 10 日に初演とある。また、佐々木隆による巻末の上演年表では、初演が宝生能楽堂で演じられたことが記されている。

³ 平辰彦「異文化プロダクションによるシェイクスピアの翻案と日本の伝統芸能」(『教養・文化論集』第 2 巻 1 号、秋田経済法科大学総合研究センター教養・文化研究所、2007 年所収)。

⁴ 『能楽タイムズ』第 287 号(昭和 51 年 2 月)と第 289 号(同 4 月)に、藤九郎新作狂言シリーズ第二弾(第 44 回)和泉会 4 月 20 日開催の案内が載り、同 293 号(同 8 月)には交通ストにより 4 月開催が中止され 6 月 15 日に開催されたことを示す下記の記事が載った。

6 月 15 日、水道橋能楽堂での第 44 回和泉会は 4 月交通ストで中止になった分。藤九郎新作狂言シリーズの第 2 弾、「ぢゃぢゃ馬馴らし」が呼び物になったのか見所は若い人で溢れムンムン。(以下略)

『能楽タイムズ』以外でも、『朝日新聞』昭和 51 年 6 月 21 日夕刊記事で 6 月 15 日開催が確認できた。また、『華泉』第 26 号(昭和 51 年 6 月)の「第 44 回和泉会」の案内にも、4 月の会が交通ストで中止になり 6 月 15 日開催となったことが記されている。

⁵ こうした確認訂正ができたのは、佐々木隆氏のお陰である。

⁶ 「新作狂言『じゃじゃ馬馴らし』論」は、実は荒井良雄が富谷俊治に代わって書いたことが、荒井良雄『やさしいシェイクスピア』英光社、2011 年、p.132 に記されている。

⁷ 佐々木隆「日本における『ぢゃぢゃ馬馴らし』」(『武蔵野短期大学研究紀要』第 7 輯、武蔵野短期大学、1993 年所収)より。

⁸ 前出の平辰彦「異文化プロダクションによるシェイクスピアの翻案と日本の伝統芸能」より。

⁹ 佐々木隆編『日本シェイクスピア総覧(CD-ROM 版)』エルピス、2005 年の上演年表による。

¹⁰ 荒井先生から、原氏の経歴についての記録や、内弟子入門許可証のコピーなど貴重な未公開資料をいただいた。原孝之の内弟子許可証には昭和 22 年(1947)12 月 9 日付の日付がある。原氏が三宅藤九郎の内弟子をしていたことは、荒井良雄編『シェイクスピア劇の翻訳と演出——坪内逍遙と加藤長治』英光社、2010 年、p.251 にも記載がある。

- ¹¹ 『演劇博物館五十年』に掲載の渡辺信夫「多々良外茂三旧蔵の狂言資料」の寄稿に、演劇博物館への狂言装束等の寄贈のいきさつや寄贈品についての記載がある。また巻末の「演劇博物館の活動と昭和演劇——大正十五年～昭和五十三年」の年表では「1949（昭和24年）1月、故多々良外茂三師使用の能狂言新収品展（21日～2月末）」との記録も載っている。
- ¹² 前出『シェイクスピア劇の翻訳と演出——坪内逍遙と加藤長治』、p.240。
- ¹³ 前出「日本における『ぢゃぢゃ馬馴らし』」の論文において、放送の冒頭が狂言版と同じ第2幕第1場の場面から始まることと、上演（放送）時間が約1時間と通常より短縮されていることを挙げて、新作狂言創作に影響を与えた可能性があるとした。
- ¹⁴ 片山博通は観世流の能楽師であり、昭和19年（1944）に第八代片山九郎右衛門を襲名したが、昭和33年（1958）に片山博通に戻した。
- ¹⁵ この台本の初出は『新潮』1991年4月特大号であるが、万作の会の協力を得、稽古の最中に生じた訂正などを加味したものが、高橋康也『間違いの狂言』白水社、2003年に収録されている。創作上の工夫は、高橋康也「フォールスタッフ変容——シェイクスピアを狂言化する」（『シェイクスピアへの架け橋』東京大学出版会、1998年所収）に詳しい。
- ¹⁶ 『観世』昭和38年（1963）5月号に掲載の座談会で、片山博太郎は、博通が大の読書家で、新刊が出るとすぐ買って読んでいたことを語っている。

参考文献

(1) 『ぢゃぢゃ馬馴らし』関連

- 荒井良雄編『シェイクスピア劇の翻訳と演出——坪内逍遙と加藤長治』英光社、2010年。
- 和泉元秀『狂言を観る』講談社、1983年。
- 滝静寿編『シェイクスピアと狂言』新樹社、1992年。
- 三宅藤九郎『藤九郎新作狂言集』能楽書林、1975年。
- 『華泉』狂言和泉会、第23号（昭和49年（1974）10月）、第26号（昭和51年（1976）6月）。
- 『能楽タイムズ』能楽書林、第18号（昭和28年（1953）8月）、第293号（昭和51年（1976）8月）。
- 佐々木隆「日本における『ぢゃぢゃ馬馴らし』」（『武蔵野短期大学研究紀要』第7輯、武蔵野短期大学、1993年所収）。
- 平辰彦「異文化プロダクションによるシェイクスピア

の翻案と日本の伝統芸能」（『教養・文化論集』第2巻1号、秋田経済法科大学総合研究センター教養・文化研究所、2007年所収）。

(2) 『二人女房』関連

- 佐々木隆編『日本シェイクスピア総覧（CD-ROM版）』エルピス、2005年。
- 茂山千五郎『千五郎狂言咄』講談社、1983年。
- 古川久・小林貢編『狂言辞典（資料編）』東京堂出版、1985年。
- 三神勲・西川正身訳「ウインザーの陽気な女房たち」（『世界文学大系・シェイクスピア』筑摩書房、1959年所収）。
- 『観世』観世会、昭和28年（1953）6月号、昭和38年（1963）5月号。
- 『能楽タイムズ』能楽書林、第24号（昭和29年（1954）3月）。

(Received: September 30, 2012)

(Issued in internet Edition: November 1, 2012)